

# 新しいふれあい社会

認定NPO法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局 我孫子市湖北台 6-5-20

平成 29 年 5 月発行（第 38 号）

Tel/Fax 04-7187-5657

## 1年生になつたら…（その 2）

樋場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

桜若葉、柿若葉と木の名を冠しての、眩いような若葉の色に、春を惜しむというより瑞々しい、個性豊かな生命力を覚えます。その実例ともなるエピソードをお届けします。

話の第一幕は、4月号で紹介した山本さん（仮名）と名乗る、ひとりの母親の率直な視線で見た気づき、心の叫びとも言いたい、電話相談に始まります。それは明日は雛まつりという、春の気配そこはかとない、穏やかな夕べのことでした。折から、大阪・豊中市の森友学園での諸々の問題で、国会では侃々諤々の激論が飛び交って、いつ果てるとも知れない騒がしさに、少々うんざり気味の中継放送が終わった直後のことでした。自然も正直で、春愁と呼びたい物憂さが漂っていました。

山本さんの相談は、そんな夕べの雰囲気に相応しく落ちついた、しかし憂いを含んだような声で、「ご相談というより、私の心の内を聴いてください」と切り出し、私は今月末には保育園を卒業し、4月に入学を待つばかりの幸せいっぱいの娘を持つ母親です。母親として私も同じ思いでいます。だって、親子ですもの、と明るく自己紹介し、そんな私が心配というより、わだかまりを持つのは、森友学園の幼稚園児が、教育勅語を何の淀みもなく一言半句間違えずに譲んじていることでした。私は感心と言うより、驚いてしまいました。同じ年頃の子どもの母親として、その能力と知力には驚いてしました。娘が通う保育園では思いもよらない教育です。そう言っても保育園に対して不平や不満などは、露ほどもありません。実は私どもの家庭では、父親が交通事故の後遺症により歩行障害があり、私は生計を支えるためにフルタイムで勤めています。そのため娘は生後 6 カ月のときから保育園のお世話になり、離乳、おむつはずしなど基本的な躾まで、お世話になりました。卒園を前にして、「感謝」と言う他に言葉を知りません。

父親は先程も言ったように交通事故の後遺症で足が不自由で、パート勤務を余儀なくされています。しかし勤務の傍ら家事も厭わず、料理、掃除の腕前は私より上手です。娘もすっかり懐いています。入学前のお勉強のほどは、自分の名前は漢字で読み書きができ、ひらがなも大方は読めて、簡単な絵本は、ひとりで読むことができ、話のあらすじを話してくれます。何よりうれしいのは、お友達も大勢でき、仲良く遊べるようになったことです。

こんな私を驚かせ、悩ませたのは森友学園での教育勅語の全文を譲んじていたことに端を発して、入学前の子どもを持つ母親の多くは、私学にしようか、公立にしようか、一度は悩むと言います。「私高公低」と言う、名だたる児童生徒の学力の程を示す言葉も社会に罷り通って入りと言います。私は一度もそんなことにふれて考えたことがありません。私は母親として甘いのでしょうか、浅はかなのでしょうか、と淡々と、しかし切々と訴えられました。

政治家、有識者の論談風発するなかで、子育て真っ最中の文字どおり市民の視線で見た山本さんの訴えは、机上論では思いもよらない気づき、心の叫びがあり、胸打つものがありました。

（独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

私は思わずもストレートに、お母さんは、母親として決して甘くも浅はかでもありません。逆に、良い意味での「日本のお母さん」を思い起こさせてくれる母親像です。障害を持つ夫を支え、生計を立てるためフルタイムで働き、子どもの成長を何よりの喜びとし、子どもの心にはしっかりと向きあつておられます。そんなご自分を好きになってください。誉めてあげてください。

明日の雛まつりは、お子さんの卒園、入学の前祝いともなるよう、ご家族で楽しんでください、と伝えました。そして私共からの願いをこめて、NHK短歌に入選した秀歌

○ たから箱 開けるがごとき 始業式 一年一組 三十五人 を紹介。

こんな生き生きとした優しい先生が待っていてくれるといいですね、と伝えました。

ここまでを第一幕とします。

第二幕は4月11日入学式の日の出来事をもって、幕開けとします。

入学式と言えば満開の桜を思い浮かべますが、今年は開花してから数日続いた花冷えもあって、盛りが長く、入学式の当日はまさに桜花爛漫、新入生を祝福するかのように咲き誇っていました。山本家のひとり娘、葉子さんも胸を膨らませ両親に伴われて、この日を迎えるました。

クラスは1年1組、クラスメイトは35人、奇しくもあのNHK短歌入選の秀歌のとおりでした。担任の先生は不惑半ばの、優しく落ち着いた「お母さん先生」でした。教師になって20年あまり、1年生の担任になったのは3回目ですが、新年度、ましてや新入生を迎えるときの清々しく心弾む思いは、まるで宝箱を開けるときのようです、と初々しいほどの挨拶がありました。

山本さんは思わず、入学を前にした子どもを持つ母親の不安を、東葛市民後見人の会の相談室に相談したところ、NHK短歌に入選した、たから箱 開けるがごとき 始業式 一年一組 三十五人という短歌を紹介され、「こんな生き生きとした優しい先生が待っていてくれるといいですね」と言って励まされたこと、その願いはそのままに適えられたようです、と感動を一気に話しました。新入生の親たちから、「オーッ」と言うような声が、いっせいに洩れました。先生は教壇を降りて、その短歌は私の気持ちそのものです。教えていただきありがとうございます。私もその短歌のような教師になることをお約束します、と深々と頭を下げられました。

この感動のシーンは、入学式当日の午後、「木曜日の相談日を待つていられずに」と断りつつ、「1年1組35人の親と先生は、入学式の日の今日、心が一つになりました」と結んだ、山本さんからの明るく、うれしい知らせがありました。

お話をこれで終わりではありません。山本さんの話をきっかけに、全員の自己紹介になりました。中でも赤沢さん（仮名）の話は感動的でした。赤沢さんは小児科医で、ターミナル期の病棟を担当しています。特に学童期の長期経過の患児、小児がんの患児は、総じて周囲の反応について極めて敏感で、言葉のコミュニケーションだけでなく、家族や医療者の態度・表情などの言葉によらないコミュニケーションが大きく作用し、強い防衛反応を示して、身体的医療ケアより、心理的ケアが求められます。先生が言われた「清々しく心弾む思い」をそのまま裏返し、「痛々しく心重い」を受け入れて、子どもの思いを共有して、腰を据えて対応することによって、子どもたちは周囲から見守られていることを感じ取ることができる、と示唆された思いがしました、と感想を語りました。すかさず先生は、良いお話を聞かせていただきました。山本さんが相談された相談室も、赤沢さんが勤められる小児病棟も、かくいう小学校も、「子どもは社会のたから」という視点に立って、点と点を結ぶと正三角ですね、と言われました。これまた感慨ひとしおのものがありました。

それから2日後の木曜日、山本さんから再度の（正しくは4回め）の電話がありました。入学式直後のクラスの顔合わせ会での感動的な話に水を差すようで、ひかえていましたが…、と前置きし、実は学童保育の件で辛い話もありました。“待機児”というと、保育園に入れず入園を待っている子どものことと思われがちですが、実は学童保育の恩恵にあづかれない子どもが少なくないことを訴える、久保さん（仮名）と名乗るお父さんがいました。訴えによると、両親は共に仕事を持つており、帰宅が遅く、留守番は今年4年生になった長男と、1年生になった次男です。長男は4年生になったことで、学童保育は外されましたが、部活動に入ることで救われています。ところが弟にとっては、兄の帰りが遅くなるので、一人で留守番する時間が長くなってしまいます。妻は帰宅後あわただしく、食事の用意をしたり、掃除をしたり、洗濯をしたり、見ているだけでも忙しなく、急き立てられるような思いがします。もちろん私も手伝いますが、互いに余裕がなく、会話も団欒と言うには程遠く、まるで事務連絡か質疑応答の様相です。これでは子どもにとっても良いはずはありません。今日も、母親は仕事から抜けられず、私ひとりが付き添って参りました。出掛けに「仕事はやめようかな」と嘆いていました、と実体験に基づいた真に迫ったものでした。みんなは黙ったまま、俯いてしました。

このときも先生は、「実は私も共働きで、夫も教員で帰りが遅くなることも少なくありません。そんな生活の中で、心掛けていることと言えば、家に帰ったら互いに教師はやめて、父親になり、母親になることです。ひととき「両親共働きのかぎっ子」などと言う言葉が社会的な用語として、通用するようになります。日中に母親がいないので、子どもの性格が暗く、時に非行に走るなどと言う識者の説が罷り通っていたこともあります。しかし、そんなことは決してありません。もしも、何らかの悪影響があるとしたら、子どもと十分に接触できない後ろめたさから、一緒にいる時間は、何でも言うことを聞いてしまったり、反対に親が留守がちだから、しつけもなっていないなどと言われないように、厳しくしつけ過ぎてしまうことです。何もかも完璧にしようとして、短い間に、子どもに要求を出し過ぎてしまうことです。「宿題できたの?」、「おやつ食べた?」から始まり、「テストはどうだった?」、「学校からの連絡はないの?」などと、矢継ぎ早に聞いてしまいます。親は会話をしたつもりになっても、子どもからみれば、急き立てられているような話ばかりです。おっしゃるように家族の団欒と言うには程遠く、質疑応答的な様相を呈してしまいます。親も子も家庭にいるときくらい気楽に過ごしたいものです。「○君の家の犬が、きのう子どもを産んだって。母犬そっくりの恥毛だって」「ふさふさ毛の子犬なんて、ぬいぐるみみたいで可愛いでしょうね」、こんな他愛もない会話で親と子がくつろげる時間があれば、留守番中のさびしさも忘れてしまうと思います。これは教師の理論ではなく、実体験からの感想です、と先生は別人のように多弁でした。その多弁さが不思議に優しく胸に響いてきました。

先生は語調を改めて、働いているお母さんは増える一方です。働く理由もさまざまで、経済的な理由だけでなく、母親自身の生き方の問題として、仕事を続ける選択をすることがあるでしょう。母親にも子育て以外の人生があるのは当然のことです。家の中ばかりに目を向けないで、社会との関係で親自身も成長していくことは、とても大切なことだと思います。

ここで求められるのが学童保育ですが、正直に言って、保護者のすべての求めに応じられないのが厳しい現実です。私も辛酸を嘗めてきたので、お気持ちよくわかります。けれど、嘆いてばかりいられません。広く目を開くと、“地域で子どもを育てる”理念のもとに、子どもたちが地域で楽しく過ごせるよう、近隣のお母さんたちが協力して、順番に子どもの面倒を見るグループを作っている例もあります。「ママ友の会」で子育ての悩みを語り合える場を持っているところもあります。

我孫子市には「あびっ子クラブ」という、公的にも知られている、地域の子どもたちの遊び場があります。子どもたちが放課後に学校の敷地内で、安全・安心して遊べ、自由に過ごせる場所です。全小学校への設置を目指し、地区の小学校名を冠し「〇〇小ちびっ子クラブ」と呼んでいます。近くは、今年の3月1日に市内で12校目となる「新木小ちびっ子クラブ」をオープンさせました。すでに地域の協力も得て、子どもたちは楽しいひとときを過ごしています。

もちろん、家族の協力は欠かせません。子どもを含めて、家事を分担し、協力してもらうことで、家族を思いやる気持ち、感謝する気持ちが養えると思います。長い話になってしましましたが、これは仕事を続けながら、子育てをしている先輩の言葉として聞いてください、と本当に長い話になりましたが、誰ひとり反発する者もなく、優しく力強い感動だけが印象として残りました。

この2回にわたる各1時間余、あわせて3時間に及ぶ、つぶさな話を第二幕とさせて頂きます。途中で、幕会いとすべきところもあったのですが、そうすると感動まで中断されてしまいそうで、ひたすら聞かせて頂き、ひたすら書かせて頂きました。その思いは語り部ともなる山本さんと同じだと思います。

そしていよいよ第三幕。先生の話に感動した1年1組のお母さん数人が、誰言うとなく集まり、ママ友的関係ができ、そろって地域の子ども会を訪ねて話を聞いたり、他地区の「あびっ子クラブ」を見学するなど、積極的に勉強しました。中でも感心したのは、市内の「根戸小あびっ子クラブ」では、提案型公共サービス民営化制度を利用し、学童保育室との一体的な運営が民間事業者に委託されていることでした。まさに自助、共助、公助の実態を見た思いがしたと言います。更に恥しげに付け加えられたのは、“1年生になったら友だち百人出来るかな”という子どもの歌ではないが、今まで住む世界が違うと思っていた、ドクターママとの家族ぐるみの友だちになれたことです。切っ掛けは何と言っても紹介して頂いたNHK短歌の入選歌だったので、二人して指を折りつつ、合作の一首を作りましたと言って、

○ 桜散り 若葉の色に変わりゆく 新しき友の息づくおもい  
という一首を披露してくださいました。この一首をもって第三幕の終了とさせて頂きます。

ふり返ると、3月の初めから4月下旬までの、数にして6回、総じて5時間余におよぶ「電話によるふれあい物語」とでも題したいような実話です。

言うまでもなく、こころの相談室は人びとの心の健康を守るために信頼感や親密感や安心感など、情緒的な支援を含む、支え合う人間関係全般を指しています。更に加えれば、相談することによって、互いの信頼関係や満足度、自主性が高まり、ひいては互いの人間的成长が生じることです。

山本さんを巡っての物語が、このことを如実に物語ってくれています。

#### 〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 梶場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報は厳正に取り扱います。

〈忘れ得ぬ一日〉 ★この日の感動は1年1組35人の心にしっかりと刻まれたことでしょう。★前号の「受験競争も教育勅語も良いですか」の表現は言葉足らずでした。偏差値教育の受験校や教育勅語の幼稚園に、行くも自由、行かぬも自由、自分の判断が大切、との想いでいた。★人間社会の秩序を維持する基準は10:20:40:20:10の黄金律、中道（間）層を挟んで意見や評価の違いと分布を示します。戦後は、教育や国防など国の根幹問題に関する考え方の相違が顕著です。天皇制もしかりです。★明治の賢人の言葉に「帝室は萬機を統るものなり、萬機に當るものに非ず。…新に偏せず古に黨せず、蕩々平々、恰も天下人心の柄を執て之と共に運動するものなり。既に政治黨派の外に在り。焉ぞ復た人心の黨派を作らんや。謹て其實際を仰ぎ奉る可きものなり」と(h)。